

(様式第7号)

地域の課題解決のための活動報告

記入日：令和4年6月13日

作成者：小谷和也

地域の課題解決のために行った活動を1つ選び、できるだけ具体的数値を挙げて報告してください。すべての項目に、一般の人に伝わりやすいようにご記入ください。

*この報告はあしや市民活動センターのホームページに掲載されます。

(登録を公開している団体のみ)

団体名	
がん患者グループゆずりは	
事業名	日時(期間)、場所
がん患者ゆずりは 25周年記念フォーラム 『いのちって何だろう!』	令和3年9月11日(土)13:30~16:30 兵庫県民会館 303号室
内容(実績) *実施したことを具体的に	受益者数
★第一部： ①西村隆さん講演 (演題：からみあういのち 宮本雅代氏代読) ALSという難病経験の中で気付いたことは、大いなるものに抱か れていることに気付くと、身体が動かない事や動けない事がどう でもよくなる。与えられた人生の中で、人とのコミュニケーションに 気を配り、豊かな心で生きて行くことが大切。 ②岩崎順子氏講演 (演題：何もない日は、本当はすごい日) 夫ががんで亡くなった時、「夫は生きているんじゃないかと、生かさ れてたんだ」ということを知った。生きる死ぬの向こう側を見せて もらえたような気がした。そして人間は、最後の一息まで生き抜く ところに意味があるのだということをも教えてもらった。生きる という本当に大事なことは何なのか？それは一人では気づけない。ず っと見守ってくれる人や支えてくれる人達がいるから見えてくるも の。“大いなるもの”の中で生かされているのが私達です。 ★第二部 パネルディスカッション ➤ 「命を考えることは、死を考えることだ」、と捉えられがちだ が、その奥に生きる力が流れている ➤ 命とは言葉で表現できるものではなく、何か壮大なものや人 との関係性の中で感じるもの。 また大切に抱え込むものではなく、自分に与えられた状況下で精一 杯に使うもの(使命) ➤ 壁にぶち当たり自殺する若者もいるが、「大きないのちの循環	(34) 人
	参加者数

<p>の中で私達は生きている事」を感じて欲しい。</p>	
<p>成果（社会へのインパクト）*どのような良い変化を社会にもたらしたかを具体的に</p>	
<p>二人に一人がガンになる時代、治療が上手く行かなかった場合には終末期における医療との付き合い方、どのような最期を迎えたいか考える必要に迫られる。その際に必要な周囲との話し合いのプロセス（ACP）が医療世界では広まりつつあるあるが、多くの市民は「命に対する自分の言葉」を持つともせず、この問題を他人事のように暮らしているのが現実である。このフォーラムでは患者体験・遺族体験を活かして「いのち」と向き合うことで上記の問題解決に取り組み、自分と社会、そして次世代との関係生を見直す意識づくりに貢献できた。また参加者全員が命について静かに見直す機会となった。</p>	
<p>今後の展望（どのように継続、発展するか）</p>	
<p>地域の繋がりや、穏やかな在宅療養を家族と共に迎えるには、自分達は何者なのかということ人間関係の中で捉える必要がある。がん患者、遺族、家族など様々な経験を持ち寄り、与えられた命の中、たとえ病や高齢になった現実を前にしても、社会構成の一員としての使命を果たそうと自ら思ってもらえるエネルギーを社会、地域に広げたい。</p>	